

戦略的創造研究推進事業
(社会技術研究開発)
令和3年度研究開発実施報告書

「SDGsの達成に向けた共創的研究開発プログラム
(社会的孤立・孤独の予防と多様な社会的ネットワークの構築)」
「演劇的手法を用いた共感性あるコミュニティの醸成によ
る孤立・孤独防止事業」

虫明 元
(東北大学 大学院医学系研究科 教授)

目次

1. 研究開発プロジェクト名.....	2
2. 研究開発実施の具体的内容.....	2
2 - 1. 研究開発目標.....	2
2 - 2. 実施内容・結果.....	4
2 - 3. 会議等の活動.....	12
3. 研究開発成果の活用・展開に向けた状況.....	13
4. 研究開発実施体制.....	13
5. 研究開発実施者.....	15
6 - 1. シンポジウム等.....	15
6 - 2. 社会に向けた情報発信状況、アウトリーチ活動など.....	16
6 - 3. 論文発表.....	17
6 - 4. 口頭発表（国際学会発表及び主要な国内学会発表）.....	17
6 - 5. 新聞／TV報道・投稿、受賞等.....	17
6 - 6. 知財出願.....	17

1. 研究開発プロジェクト名

演劇的手法を用いた共感性あるコミュニティの醸成による孤立・孤独防止事業

2. 研究開発実施の具体的内容

2 - 1. 研究開発目標

(1) スモールスタート期間終了時

コロナ禍において、コミュニティの絆が弱まり、孤立化・孤独化するリスクのある人々への共感性が失われ、それが人々の孤独感に強く影響して、人々の社会的孤立の深刻化が懸念されている。本プロジェクトでは、応用演劇的手法を用いて、共感性あるコミュニティの回復を目指す。そのために参加者が互いに語り、傾聴し、演じるための安全基地となるような豊かなコミュニティを指向する、社会情動的スキルを育む取り組みを実施する。このために、応用演劇と科学的人間理解を組み合わせたコミュニケーション教育プログラムを開発し、コミュニティを指向するような社会情動スキルを育成し、それぞれのコミュニティの共感性を醸成することに貢献できるようにする。このプログラムをプロトタイプとして、テキストを作成し、継続的な取り組みや他の施設での実施のための資料とする。これを一つのアウトプットとし、演劇的手法を用いたコミュニケーション教育プログラムの実践者の育成に役立てられるようにする。演劇グループとの連携に関しては地元の演劇団体としてのPLAY ART! せんだい、全国・海外のネットワークのあるプレイバックシアターの演劇チームと連携して実施する。これらによって、社会情動スキル全般に関する理解と、実践を組み合わせた協働的な学びの体制を構築する。

スモールスタートでは、東北大学、宮城教育大学の学生を対象として上記のプログラムを実施し、評価する。その際に、各種特性因子を導入して多角的に評価する。特に孤独に関してはUCLAの孤独感尺度、孤立に関してはルーベンのソーシャルネットワーク尺度を導入する。調査にあたっては、高度教養教育機構の学生支援センター、災害精神科学の先生方と連携して行う。また、瞳孔計測のシステムを用いた瞳孔反応を別途導入して、一部の学生にはこれと性格検査を組み合わせ、孤独の評価検討をする。このような多角的な特性解析と孤独化の指標と関係性の開発と解析が目標となる。加えて人間形成に関わる質的調査を行い評価する。

孤立防止のためのプログラムとしては、リスニングアワー (LH) の導入を行う。このLHは先行してニューヨーク大学で導入されており、これを導入したニーシャ氏と、日本でリスニングアワーのガイド育成にあっている小森亜紀氏と連携して導入を行う。このガイド育成プログラムはe-learningと実践とから構成され、基本的な安心の場としての、包摂的で共感的な対人関係の構築の基礎、すなわち受講者の共感的なコミュニケーションスキルが育成されるプログラムにもなっている。

(2) 本格研究開発期間終了時

「社会的孤立・孤独メカニズム理解と、社会的孤立・孤独を生まない新たな社会像の描

出」に関しては、応用演劇と科学的人間理解を組み合わせたコミュニケーション教育プログラムにより、社会情動スキルを育成しつつ、それぞれが属するコミュニティにおける共感性を醸成することを目指す。本格研究ではコミュニティを単位とし、様々なコミュニティの多様性を考慮しながら、応用演劇とそれぞれのコミュニティのニーズからプログラムを柔軟に適応できるようにし、さまざまなコミュニティの醸成やそのためのファシリテータの育成に役立てる。これをテキスト化してアウトプットとし、演劇的手法を用いたコミュニケーション教育プログラムの実践者の育成に役立てられるようにする。演劇家とコミュニティの連携に関しては地元の演劇団体としてのPLAY ART！せんだいとその関連団体、全国・海外のネットワークのあるプレイバックシアターの演劇チームと連携して実施する。これらによって、社会情動スキル全般に関する理解と、実践を組み合わせた協働的な学びの体制を構築する。またニーズのあるコミュニティへの支援を行う。

また「人や集団が社会的孤立・孤独に陥るリスクの可視化と評価手法（指標等）の開発」としては、各種特性因子（5因子、共感化指数、システム化指数、自己効力感、愛着スタイル等）を導入して多元的に評価する。特に孤独に関してはUCLAの孤独感尺度、孤立に関してはルーベンのソーシャルネットワーク尺度を用いる。コミュニティにおけるそれぞれの在り方、ミッションから評価すべき尺度を見出し、多元的かつ定量的、定性的な調査を継続して、コミュニティにおける人々の言葉の質的評価も含め、コミュニティの共感性を評価検討する。

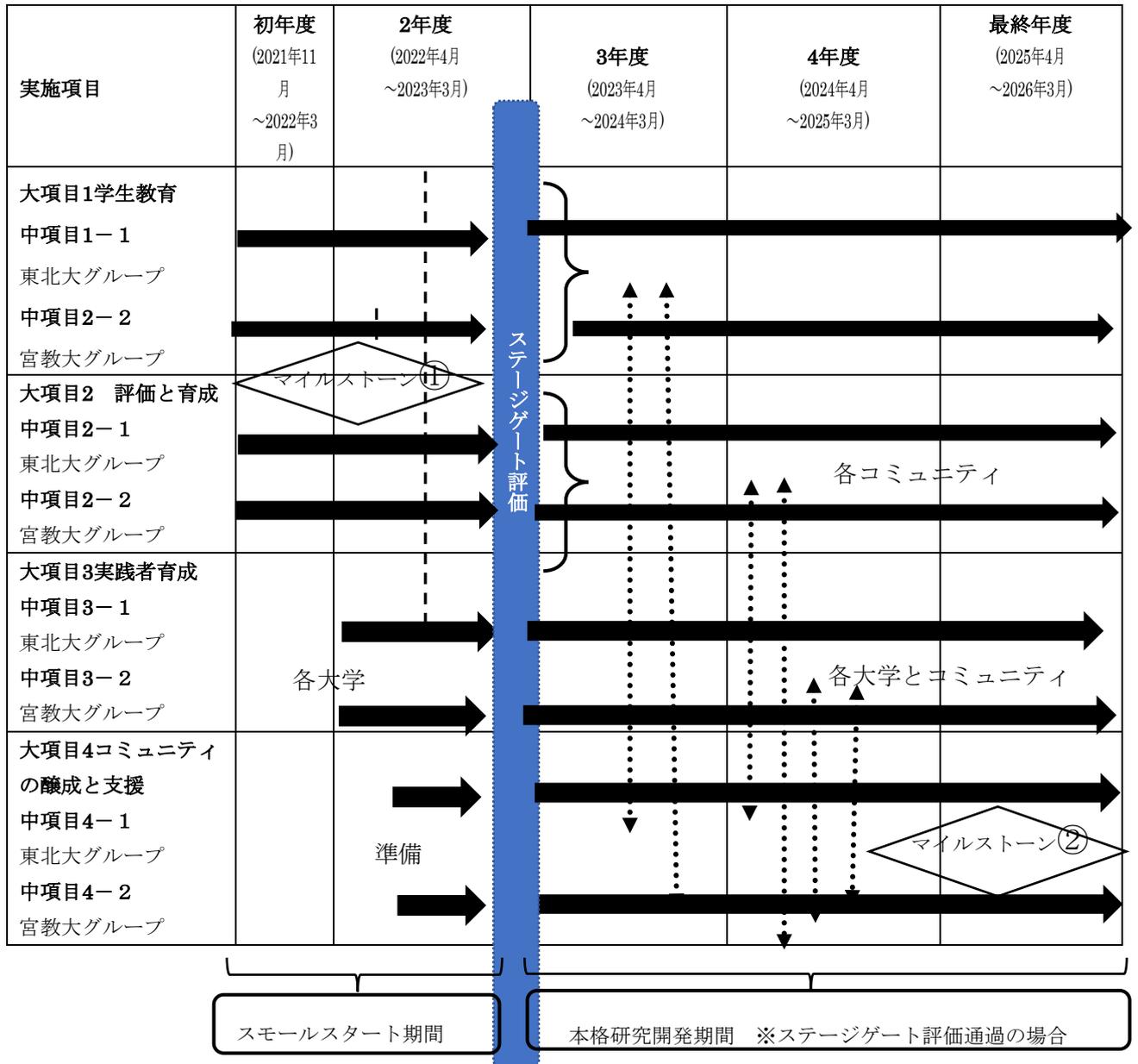
「社会的孤立・孤独を予防する社会的仕組み」としては、コミュニティの共感性を醸成することで人々の絆を回復し、創出することで孤立・孤独の防止に繋げていく。そのために演劇的手法とそれぞれのコミュニティとの連携を促し、そのような活動を推進するファシリテーターを育成する。そしてそのファシリテーターが、ニーズのあるコミュニティで活躍できるように応用演劇とそれぞれの分野の連携を促し、教育的ワークショップを行う、またそのような活動を支援する。

また、孤立防止のためのプログラムとしてのリスニングアワー（LH）の導入を拡大する。コロナ禍でもできるこのLHは、コミュニティの中での様々な声を引き出す場として役割が期待される。コミュニティの中には、言いたくても言えない、胸の内に抑えられた思いや経験があり、それが共有されることでコミュニティとしての気づきにつながり、共感性を育むことが期待される。このような取り組みをニーズのある様々なコミュニティで展開することでコミュニティの共感性を向上させ、多様な参加を受け入れ、承認することで孤立・孤独の防止に貢献できる。

海外の連携者とも随時連絡を取り合い、プログラムの更なる向上を目指すPDCAサイクルを行う。全国の応用演劇の関係者、地元の応用演劇活動に関わる団体とも連携してローカルかつグローバルに行う体制を構築し、語りと身体活動の両面から社会情動スキルを育成する。

2 - 2. 実施内容・結果

(1) 研究開発の主なスケジュール



① マイルストーン

2年末までに東北大学、宮教大における学生と教員へのコミュニティ・マインドをもった社会情動スキル育成のための育成方法と評価法の確立

② マイルストーン

演劇的手法を用いたコミュニティの共感性を育むプログラムをニーズのあるコミュニティにおいて実践し、評価と分析をしつつ各コミュニティの醸成と支援を展開する。

■今年度の到達点1：大学生教育に関わる社会情動スキルの育成

大学生を対象として、学部横断的な社会情動スキル育成のための教育を演劇関係者との連携でおこなう。東北大学と宮城教育大学のグループで実践経験を教育プログラム化を目指して実践する。

実施項目①-1 東北大学全学教育での社会情動スキルの育成

実施内容：全学教育の学生を対象として、学部横断的な社会情動スキル育成のための教育を演劇関係者との連携でおこなう。宮城教育大学の虫明美喜、即興再現劇+PLAY ART! せんだいと連携によって実施する。リスニングアワーを導入する準備をすすめる。そのためにはJoanathan Fox氏の協力も得る。

期間：令和3年11月—令和8年3月31日

実施者：虫明元（東北大学・教授）

対象：大学初年度学生

実施項目①-2 宮城教育大学での社会情動スキルの育成

実施内容：教育を目指す学生を対象として、社会情動スキル育成のための教育を演劇関係者との連携でおこなう。即興再現劇+PLAY ART! せんだいと連携して実施する。

期間：令和3年11月—令和8年3月31日

実施者：虫明美喜（宮城教育大学・特任准教授）

対象：大学生

■今年度の到達点2：社会情動スキルから見た孤立・孤独の評価方法と育成方法

孤立・孤独の評価方法に関して多面的な評価の尺度を検討し、背景にある孤立・孤独の原因を解明する。

実施項目②-1 社会情動スキルの多次元評価法の開発

実施内容：性格特性、孤独、孤立指標としてUCLAの孤独感尺度、孤立に関してはルーベンのソーシャルネットワーク尺度、生理学的指標も加えた指標間の関連性を統計的に分析する。

期間：令和3年11月—令和8年3月31日

実施者：虫明元（東北大学・教授）

対象：大学初年次学生

実施項目②-2 教育的ワークショップでの社会情動スキルの育成方法の開発

実施内容：教育を目指す学生を対象として、社会情動スキル育成のための教育を演劇関係者との連携でおこなう。育成方法の確立を行い、情報を共有する。

即興再現劇+PLAY ART! せんだいと連携して実施する。

期間：令和3年11月—令和8年3月31日

実施者：虫明美喜（宮城教育大学・特任准教授）

対象：大学生

(2) 各実施内容

実施項目①-1 東北大学全学教育での社会情動スキルの育成

展開ゼミと呼ばれる東北大学の1年生を対象とした全学教育で虫明元、虫明美喜担当の「演劇的ワークショップ」においてPLAY ART! せんだい（及川多香子共同代表）大河原準介による演劇ワークショップを毎週月曜日3回連続（12/6、12/13、12/20）で開催

した。



写真 1 演劇ワークショップ

また遠隔形式でプレイバックシアターと連携した演劇ワークショップを同クラスで行った。

プレイバックシアター との遠隔でのワークショップ
小森亜紀、宗像佳代(1月22日、23日) +プレイバックコース

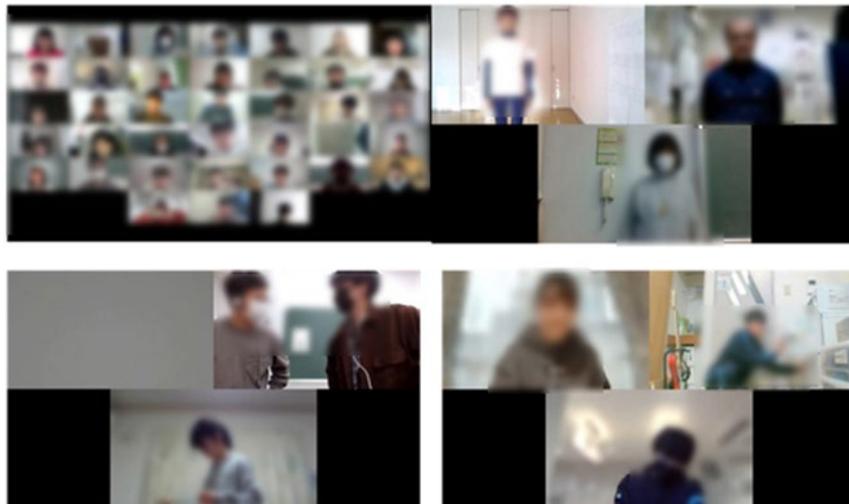
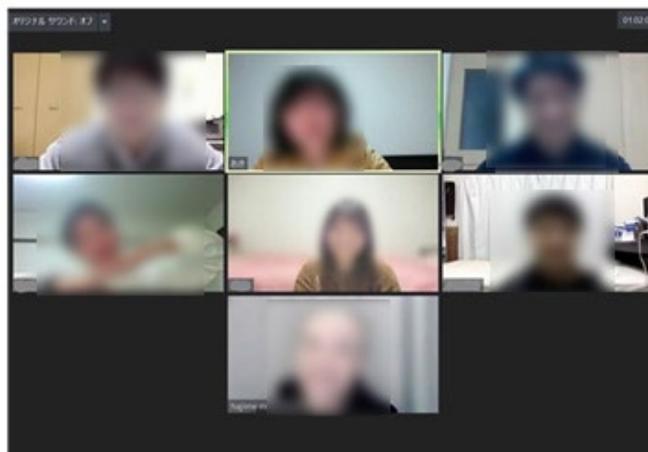


写真 2 遠隔形式の演劇ワークショップ

リスニングアワーと呼ばれる遠隔で行う互いの経験を話す場を6回(2/5、2/8、2/19、2/22、3/5、3/8) 行い東北大と宮城教育大の学生及び一部教員も参加して行った。小森亜紀がリスニングアワーのガイドとしてつとめた。代表者虫明元、または虫明美喜と一緒に参加してサポートを行った。

リスニングアワー@zoom20時から21時



- ①2/ 5(土)
- ②2/ 8(火)
- ③2/19(土)
- ④2/22(火)
- ⑤3/ 5(土)
- ⑥3/ 8(火)

写真 3 リスニングアワー

実施項目①ー2 宮城教育大学での社会情動スキルの育成

11/30と12/7に宮城教育大学の国語学生に対する演劇的なワークショップ、さらに1/12、19に宮城教育大学の授業の中で PLAY ART! せんだい(及川多香子共同代表)と連携して「演劇的ワークショップ」を開催した。

宮教大の国語学生にたいする対面ワークショップ
虫明 元 虫明 美喜 (11月30日 12月7日)
PLAY ART! せんだい との対面ワークショップ
及川多香子、菊池佳南 (1月12日 19日)



写真 4 演劇的ワークショップ

プレイバックシアターの演劇家2名を招いて3日間(3/9、3/10、3/11)集中ワークショップとして宮城教育だと東北大学の学生及び一部教員に関して行った。



写真 5 集中ワークショップ

実施項目②-1 社会情動スキルの多次元評価法の開発

展開ゼミの中で、性格特性(自己効力感5因子性格特性 システム化指数 共感化指数 愛着特性 統制の所在 アレキシサイミア内省特性指数) 孤独感尺度 ルーベン・ソーシャル・ネットワーク・スケール改訂版 (LSNS-R) 孤立尺度、指標を比較した。またプレイバックシアターの集中ワークショップ、リスニングアワーの参加者にはアンケート形式で調査を行った。

実施項目②-2 教育的ワークショップでの社会情動スキルの育成方法の開発

宮城教育大学の教員免許更新講習から得られた知見、および演劇的ワークショップでの実践をまとめて開発しつつある育成方法に関して紀要に投稿した。

(3) 成果

実施項目①-1 東北大学全学教育での社会情動スキルの育成

2つの演劇的ワークショップは対面で行ったため、遠隔授業ばかりの学生たちには大変なインパクトであり好評であった。あとの評価方法の開発にも関連するが、性格特性と開始時と終了時の孤立孤独感の評価を行った。

またリスニングアワーは参加しやすい夜の時間に6名程度で開催したが、これも好評であった。リスニングアワーのアンケート結果を以下にまとめる。

リスニングアワー後の効果に関するアンケート

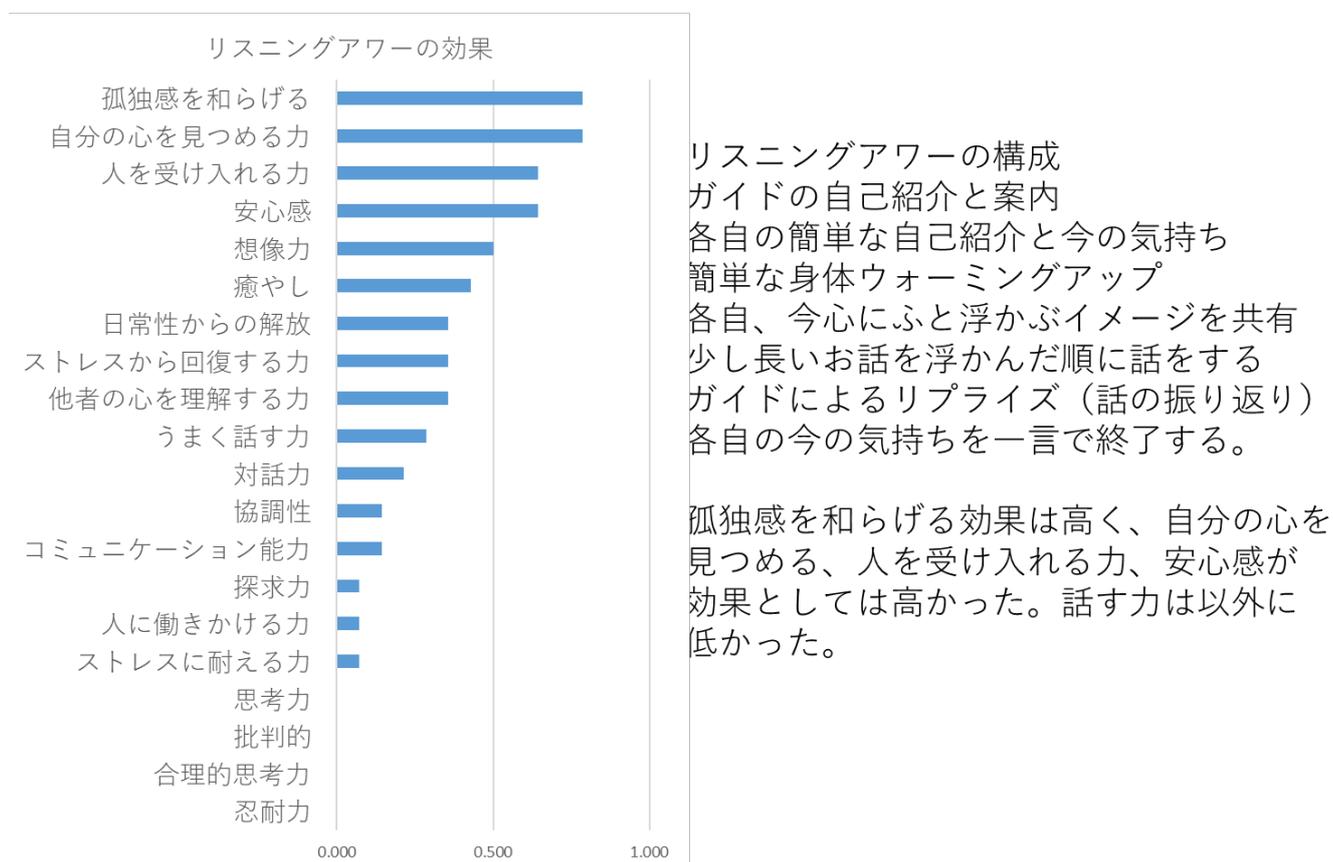


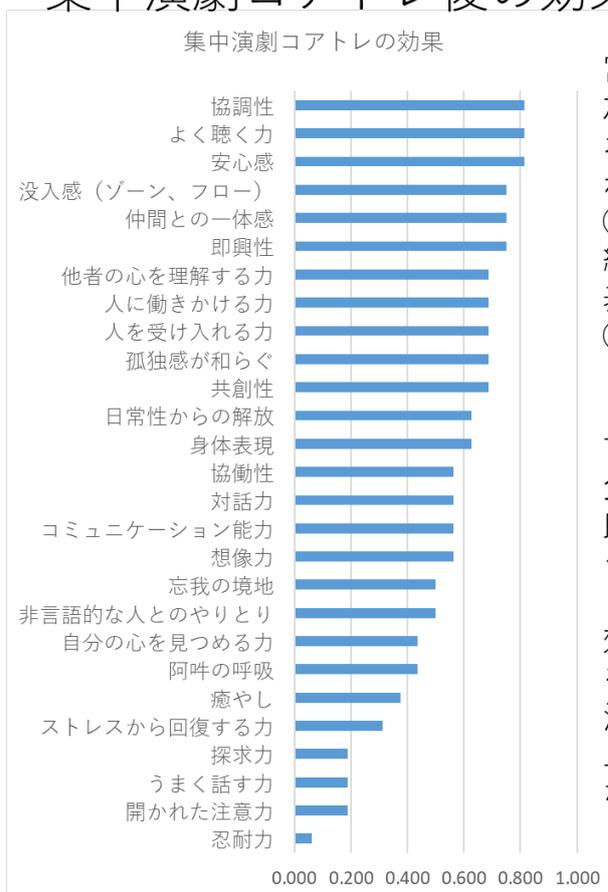
図 1

実施項目①ー2 宮城教育大学での社会情動スキルの育成

2つの演劇的ワークショップは対面で行ったため、特に多人数の授業ではオンライン授業でしか授業参加がなかった学生たちには大変なインパクトであり、好評であった。当該の授業は国語科の授業であっただけに、当初は「なぜ国語で演劇？」という疑問を感じた学生も少なくなかったが、ワークショップの進行につれて、そういう戸惑いよりも、リアルな学びに対する満足感が増していく様子がみてとれた。振り返りのアンケートの中で特に目立ったのは、ほとんどの学生が始まる前の「不安・緊張」を挙げていたが、それが一コマの授業の間に楽しさに代わり、同じ専攻同士のほぼ初めてとも言える対面での密な活動により、充実感・自己肯定感・達成感を感じる主体に変化していたことが伺えた。国語専攻の学生、あるいは国語という授業タイトルゆえのこともあるだろうが、コミュニケーションというと圧倒的に言葉によるそれをイメージする機会が多いが、今回の演劇的手法を用いたコミュニケーションワークショップの実践を通して、ことばを用いないコミュニケーションの有用性、相手に伝わることを体で感じることの喜び、グループで助け合い

つの課題を達成することの手応えの大きさが、学生たちには強い印象として残ったようである。コロナ禍で対面の会話や交流の楽しさと充実感を忘れていた、幸せだった、という感想もあり、また、身近な人間関係が改めて深められた、今後は楽しみ、という感想からは、彼ら自身の社会情動スキルが確かに高まったことが確認できたと感じている。

集中演劇コアトレ後の効果に関するアンケート



宮城教育大、東北大、学生、一部教員の参加のもとで演劇的ワークショップは3日間おこない3日めには3つのグループに分かれてパフォーマンスを行った。

①短いフォームで観客の一人の方の経験した出来事の気持ちを即興で表現する。

②参加者のストーリーをそのインタビューし、演技、音楽を即興で行う。

丁度3月11日の午後であり、たまたま11年前の震災の日の出来事が話に出て即興で演じられた。とても感動的なシーンであった。

効果に関するアンケートで、聴く力、他者を理解する力、を挙げている。また一体感没頭するなどの演劇独自に効果を上げる参加者が多かった。一方で話す力、などは以外に低かった

図 2

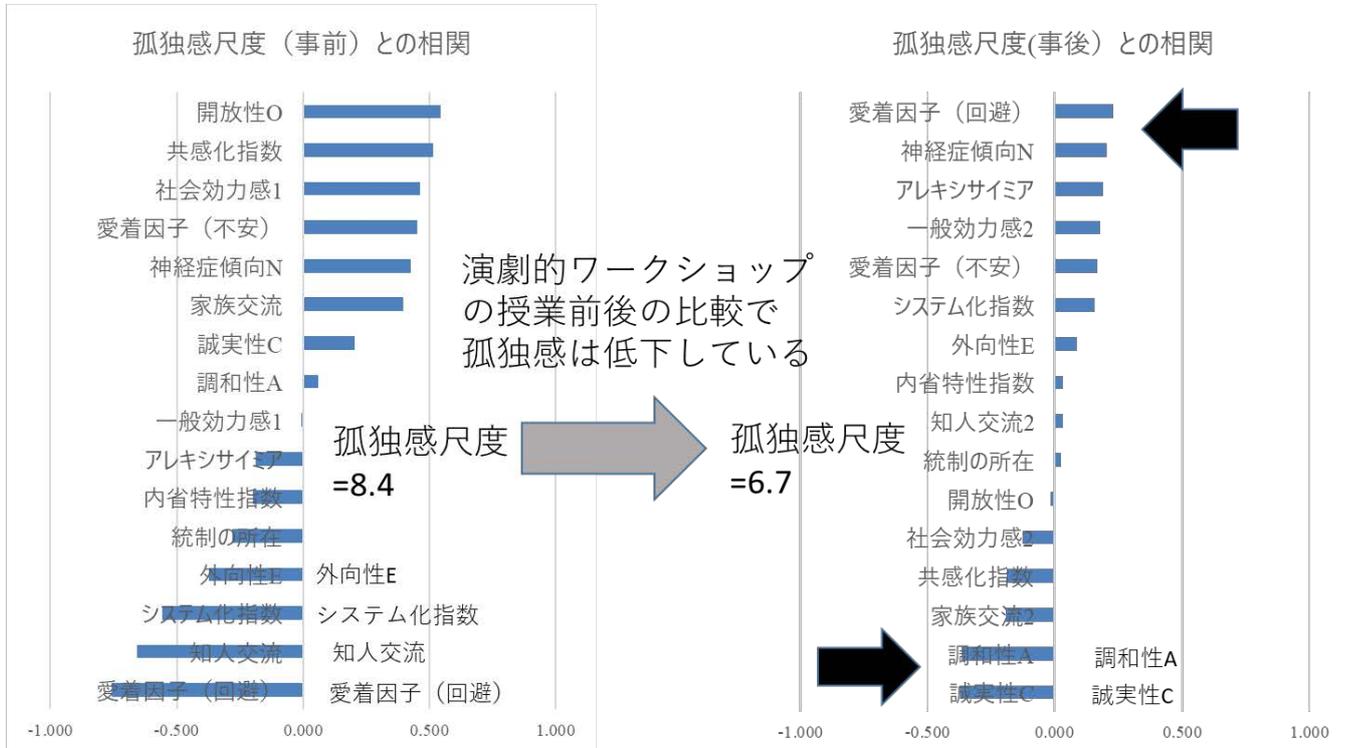
実施項目②-1 社会情動スキルの多次元評価法の開発

演劇的ワークショップを含む後期の授業の前後での性格特性と開始時と終了時の孤立孤独感の評価を行った。結果の要点は以下のようになった。

- 1 孤独感は愛着因子、5因子の開放性、神経症傾向と関係が見られた
- 2 孤独感は孤立指標のうち特に知人の交流と負の相関が見られた
- 3 演劇的ワークショップの終了後は孤独感の低下が認められた
- 4 終了後は孤独感との性格特性因子との有意な関係は見られなくなった

一つの解釈として、当初は孤独感は個人の性格特性に相関して変化を受けやすいが、演劇的手法のワークショップにより、性格差を超えて孤独感低下の効果があると推定された。これはまだデータ数 (n=32) と少ないためかもしれない。さらなる解析にはデータ数を増やす必要があると考えられる。

授業前後での孤独感と性格因子との関連



授業前は孤独感と愛着因子、開放性、外向性等の性格因子との相関が顕著

授業後は孤独感と他の性格因子との相関が低下している

図 3

実施項目②-2 教育的ワークショップでの社会情動スキルの育成方法の開発

大学生になり、演劇経験などのない学生がほとんどの授業においては、人間のコミュニケーション行動との関連についての講義と演劇的なワークショップを組み合わせることが有効であると考えられた。小学校や中学校の生徒とは異なり、大学生の大半は、大学という学問を学ぶ場において、なぜこのような活動をするのか理解を求めようとする傾向が高い。演劇はオラリティとしての文化に属し、身体性が問われるが、一方で人間科学は、たとえリベラルアーツとして分野横断的に領域を拡張しても、リテラシーとしての知識、科学研究を含んだ言語に依存する。またこのような学びから、本来演劇的手法に伴うコミュニケーションやコラボレーションが社会的な実践活動に結びつことを理解することは、このような未知の領域に取り組むためのモチベーションともなり、活きた学びにもなる。

これらの試みはまだ実践の方法論として確立の途上ではあるが、一つの事例報告として「応用演劇と科学的な人間理解を組み合わせた協働的学びの試み」(虫明美喜・虫明 元『宮城教育大学紀要』56巻2021)としてまとめ、発表した。

(4) 当該年度の成果の総括・次年度に向けた課題

プロジェクトの達成目標に対しては、11月～3月までの比較的短い期間ではあったが、連携するPLAY ART! せんだい、スクール・オブ・プレイバックシアター日本校と連携して、ワークショップを実施できた。またその活動に関しての各種の性格特性を含めた多次元の評価を実施できた。また関連して高校更には中学校の出前講義の依頼もあり、対応することができた。その意味では当初の予定より進んでいると感じている。要因としては、実際に活動を進めることで、関心を持ってくれる関係者が次第に増えてきたことによると思われる。また演劇的ワークショップを終了した者の一部が、その後も連携して活動を継続させる体制を準備できたことは次の年度へつなげる一つの成果であった。

実施して得られた結果は、まだ事例が少なく一般化は慎重であるべきと思われるが、孤独感への性格特性としてのリスク因子のようなものが見つかったことと、同時に演劇的手法による授業の前後比較より孤独との関連性が変化することは大変興味深い結果であった。またオンラインとオフラインでの実施ができたことで、コロナ禍でも演劇的な手法は継続できると実感できた。リスニングアワーや演劇的手法の効果として、孤独感を和らげる効果と同時に、コミュニケーションにおける聴く力、人を受け入れる力等の効果を評価する参加者が多くいることは、コミュニティ醸成のためのスキルとして特に重要な点だと考えられる。

2 - 3. 会議等の活動

年月日	名称	参加者	場所	概要
2021/11/4	PAS ミーティング	虫明元・美喜 PAS	Zoom	実施計画
2021/11/6	PBT ミーティング	虫明元・美喜 PBT	Zoom	実施計画
2021/11/15	PAS ワークショップ下見	虫明元・美喜 PAS	東北大学対面	実施前見学打ち合わせ
2021/11/15	PAS ミーティング	虫明元・美喜 PAS	対面	東北大実施計画
2021/12/20	PAS ミーティング	虫明元・美喜 PAS	東北大学対面	振り返り
2021/12/27	PAS ミーティング	虫明元・美喜 PAS	Zoom	宮教大実施計画

PAS : PLAY ART! せんだい

PBT : プレイバックシアター

3. 研究開発成果の活用・展開に向けた状況

東北大学、宮城教育大学を中心に研究開発を行っているが、今年度、宮城教育大学附属中学校、仙台育英高等学校において、出前講義の形で実施した。

招待講演として「コロナ禍に於ける脳科学 ～孤立・孤独の影響とケア～」(令和3年全国婦人保護施設等 指導員研究協議会令和3年12月3日オンラインで講演)では、いわゆるDV等の被害婦人の孤立孤独の問題と、保護活動にかかわる指導員育成のための演劇の可能性を紹介した。また認知症のケアにかかわる人々へのコミュニケーションの仕方の醸成としての演劇的活用の可能性についても、認知症介護研究・研修東京センター@浴風会、認知症介護情報ネットワーク(DCnet)の関係者に関心を持ってもらい、現在執筆依頼のような形で対応を開始しているが、対面でのワークショップの開催も模索する予定がある。

4. 研究開発実施体制

(1) マネジメント体制

PDCAサイクルに関しては、毎回の活動後には参加者からのフィードバックをgoogle form等のアンケート形式でおこない、これをプログラムのチェックに用いる。また東北大学、宮城教育大の教育担当の関係者にプログラムの外部からのチェックをお願いする。海外の演劇家である Jonathan Fox 氏、NYUのNisha Sajjani 氏にも意見を伺い、プロジェクトのチェックをお願いする。



図 4

(2) グループごとの概要

東北大学グループ (虫明 元)

東北大学大学院医学研究科

- 項目1：大学生教育に関わる社会情動スキルの育成
東北大を中心に学生に対して演劇関係者との連携で社会情動スキルを育成する実践者のプログラムを開発し実践する (中項目1-1)
- 項目2：社会情動スキルから見た孤立・孤独の評価方法と育成方法
社会情動スキルの観点から孤立・孤独の評価と原因を解明する (中項目2-1)
- 項目3：社会情動スキルを持った教育実践者の育成
東北大を中心に若手教員や学生を指導する立場の教員に、演劇関係者との連携で社会情動スキルを育成する実践者のプログラムを開発し実践する。(中項目3-1)
- 項目4：全国規模での孤独化防止事業を実践する教員の育成 (本格研究実施項目)
即興再現劇の全国のネットワークを活用し、ニーズのあるコミュニティへ演劇家とのパフォーマンスを行い、同時にそのためのファシリテーターになる人材を育成する。(中項目4-1)

プロジェクトにおける本グループの位置づけ

宮城教育大学、即興再現劇チーム、PLAY ART! せんだいと連携して実施する。

宮城教育大学グループ (虫明 美喜)

宮城教育大学国語教育

- 項目1：大学生教育に関わる社会情動スキルの育成
宮城教育大を中心に学生に対して演劇関係者との連携で社会情動スキルを育成する実践者のプログラムを開発し実践する (中項目1-2)
- 項目2：社会情動スキルから見た孤立・孤独の評価方法と育成方法
社会情動スキルの育成方法と孤立・孤独の評価とを関連付け原因を解明する (中項目2-2)。
- 項目3：社会情動スキルを持った教育実践者の育成
宮城教育大を中心に若手教員や学生を指導する立場の教員に、演劇関係者との連携で社会情動スキルを育成する実践者のプログラムを開発し、実践する。(中項目3-2)
- 項目4：全国規模での孤独化防止事業を実践する教員の育成 (本格研究実施項目)
即興再現劇の全国のネットワークを活用し、ニーズのあるコミュニティへ演劇家とのパフォーマンスを行い、同時にその実践のためのファシリテーターになる人材を育成する。(中項目4-2)

5. 研究開発実施者

東北大学グループ（リーダー氏名：虫明 元）

氏名	フリガナ	所属機関	所属部署	役職 (身分)
虫明 元	ムシアケ ハジメ	東北大学	大学院医学系研究科	教授
大城 朝一	オオシロ トモカズ	助教	大学院医学系研究科	助教
渡辺 秀典	ワタナベ ヒデノリ	助教	大学院医学系研究科	助教
梶田祐貴	カジタ ユウキ	助手	大学院医学系研究科	助手
加藤尚美	カトウ ナオミ	技術補助	大学院医学系研究科	研究補助
高橋美登利	タカハシ ミトリ	技術補助	大学院医学系研究科	研究補助

宮城教育大学グループ（リーダー氏名：虫明 美喜）

氏名	フリガナ	所属機関	所属部署	役職 (身分)
虫明美喜	ムシアケ ミキ	宮城教育大学	教育学部	特任准教授
遠藤 仁	エンドウ ヒトシ	宮城教育大学	教育学部	教授
津田 智史	ツダ サトシ	宮城教育大学	教育学部	准教授

6. 研究開発成果の発表・発信状況、アウトリーチ活動など

6-1. シンポジウム等

年月日	名称	主催者	場所	参加人数	概要
2021/12/6	PAS 演劇ワークショップ	虫明元・美喜 PAS	東北大学対面	38	演劇ワークシ ョップ実施
2021/12/13	PAS 演劇ワークショップ	虫明元・美喜 PAS	東北大学対面	38	演劇ワークシ ョップ実施
2021/12/20	PAS 演劇ワークショップ	虫明元・美喜 PAS	東北大学対面	38	演劇ワークシ ョップ実施
2022/1/12	PAS 演劇ワークショップ	虫明元・美喜 PAS	宮教大対面	30	演劇ワークシ ョップ実施
2022/1/19	PAS 演劇ワークショップ	虫明元・美喜 PAS	宮教大対面	30	演劇ワークシ ョップ実施

2022/1/22	PBT 演劇ワークショップ	虫明元・美喜 PBT	Zoom 東北大	38	遠隔演劇ワー クショップ実 施
2022/2/5	PBT リスニングアワー	虫明元・美喜 PBT	Zoom	8	リスニングア ワー実施
2022/2/8	PBT リスニングアワー	虫明元・美喜 PBT	Zoom	8	リスニングア ワー実施
2022/2/19	PBT リスニングアワー	虫明元・美喜 PBT	Zoom	8	リスニングア ワー実施
2022/2/22	PBT リスニングアワー	虫明元・美喜 PBT	Zoom	8	リスニングア ワー実施
2022/3/5	PBT リスニングアワー	虫明元・美喜 PBT	Zoom	8	リスニングア ワー実施
2022/3/8	PBT リスニングアワー	虫明元・美喜 PBT	Zoom	8	リスニングア ワー実施
2022/3/9	PBT 演劇コアトレーニン グ	虫明元・美喜 PBT	東北大学対面	20	対面演劇的ワ ークショップ 実施
2022/3/10	PBT 演劇コアトレーニン グ	虫明元・美喜 PBT	東北大学対面	20	対面演劇的ワ ークショップ 実施
2022/3/11	PBT 演劇コアトレーニン グ	虫明元・美喜 PBT	東北大学対面	20	対面演劇的ワ ークショップ 実施

6-2. 社会に向けた情報発信状況、アウトリーチ活動など

(1) 書籍、フリーペーパー、DVD

学ぶ脳 虫明元 岩波科学ライブラリーの電子書籍化 (2022年3月より電子版)

(2) ウェブメディアの開設・運営

インターネットメディア配信「エンゲキは人をどう育むか 第一部」

出演：虫明元 (東北大学大学院医学系研究科教授)

虫明美喜 (宮城教育大学特任准教授)

及川多香子 (PLAY ART! せんだい 共同代表)

聞き手：大河原 準介 (演劇企画集団LondonPANDA)

せんだい・アート・ノード・プロジェクト 2022年2月20日撮影

https://youtu.be/sz0wYPTs_Ow

(3) 学会 (6-4.参照) 以外のシンポジウム等への招聘講演実施等

6-3. 論文発表

(1) 査読付き (2 件)

●国内誌 (2 件)

- ・ 虫明美喜 虫明 元 応用演劇と科学的な人間理解を組み合わせた協働的学びの試み 宮城教育大学紀要 56巻pp.373-383 2021
- ・ 虫明 元 脳科学の視点で読むドストエフスキーとポリフォニー Brain and Nerve 73 12月号pp.1357-1361 2021

●国際誌 (0 件)

(2) 査読なし (0 件)

6-4. 口頭発表 (国際学会発表及び主要な国内学会発表)

(1) 招待講演 (国内会議 1 件、国際会議 0 件)

- ・ 虫明 元 コロナ禍に於ける脳科学 ～孤立・孤独の影響とケア～令和3年全国婦人保護施設等 指導員研究協議会2021年12月3日オンラインで講演

(2) 口頭発表 (国内会議 2 件、国際会議 0 件)

- ・ 虫明 元 部分と全体学による脳の理解 第99回日本生理学会2022年3月16日
- ・ 虫明 元 動的な恒常性-変わるものと変わらぬもの-第99回日本生理学会大会2022年3月16-18日

(3) ポスター発表 (国内会議 0 件、国際会議 0 件)

6-5. 新聞/TV報道・投稿、受賞等

(1) 新聞報道・投稿 (0 件)

(2) 受賞 (0 件)

(3) その他 (0 件)

6-6. 知財出願

(1) 国内出願 (0 件)

(2) 海外出願 (0 件)